

# てん の う い せ き 天王遺跡

## 第10次発掘調査

所在地	鈴鹿市岸岡町589-2
調査目的	病院施設建設に伴う記録保存
調査期間	平成14年10月3日～継続中
調査面積	約1,700㎡
調査主体	鈴鹿市考古博物館

### はじめに

天王遺跡は鈴鹿川右岸、低位段丘面の東端に当たります。北側には金沢川、南側には田古知川が流れ、遺跡の500mほど東方で合流して伊勢湾に注ぎ込んでいます。

天王遺跡での調査は今回で10度目の調査となりました。過去の調査では飛鳥～奈良時代の建物群が数多く検出されています。3・5次調査では、南東から北東へと緩やかにカーブした幅3～5mの溝が全長約100mにわたり検出されています。8次調査でも同様の溝が見つかっており、一連のものとして考えると、現在病院が立てられている周辺を巡っている溝とみることができます。

9次調査では豪族居宅とも考えられるような、飛鳥時代の掘立柱建物が計画的に配置された様子が明らかになっています。その他に伊勢神宮領に関連する墨書土器や、水晶製の基石、赤色顔料が付着した石製品が中世の遺構から見つかっています。

今回の調査は9次調査地点の北西に当たります。

### 調査成果

今回の調査では、3・5・8次調査で検出された大溝の内側で新たな溝を検出しました。その他掘立柱建物、井戸、溝、土坑、柱穴などを検出しました。

溝SD1001

北東から南西の方向に直線的な溝を全長約5.5mにわたり確認しました。幅約3mで断面の形状はV字形を呈し、検出面からの深さが約2mに及びます。弥生土器の高坏などが出土し、弥生時代後期の濠の一部と考えられます。また、同じ場所に古墳時代後期～飛鳥時代の溝が再び掘られ、多くの須恵器や土師器が出土しました。SD1001は長期間、再掘削されながら存続していたと考えられます。

### 掘立柱建物

掘立柱建物SB1030は3?×4間以上の南北棟の掘立柱建物。南北辺は調査区外や攪乱されており、建物の中央部のみが確認されました。柱穴は90cm程の隅丸方形で20～25cmの柱痕跡が検出され、柱間は175cm等間です。

掘立柱建物SB1035は3×3間の総柱建物です。柱穴の大きさは50～70cmで柱間は110～150cmと一定ではありません。

その他にも建物の一部分のみ検出されたものがいくつかあります。

### 井戸SE1019・井戸SE1020

SE1019は長軸2.6m、短軸2.1mの楕円形の井戸です。深さは2.7mで内部は袋状となっており横に広がっています。底面には80cm程の方形の井戸枠が作られており、その内部は約60cmの円形に掘られていることから曲物が据えられていたと考えられます。

SE1020は1.1mの円形で深さは2.6mを測ります。

両遺構とも室町時代頃のものと考えられ、古瀬戸・常滑焼が出土しています。その他の遺物には今回新たに発見された素弁六葉蓮華文軒丸瓦の他、素弁八葉蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦など白鳳寺院のものと考えられる瓦片が多く出土しました。

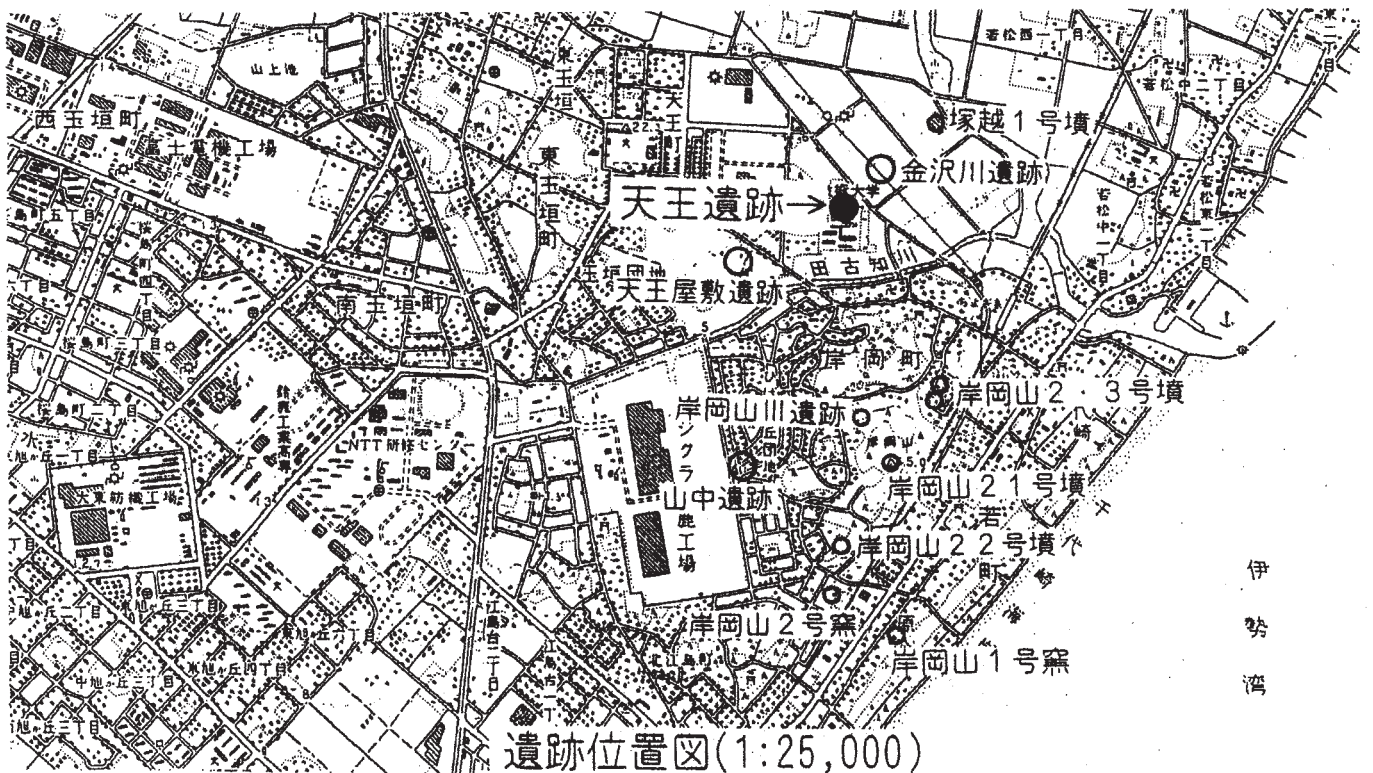
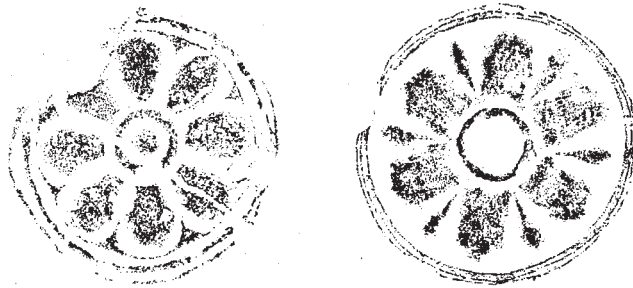
### まとめ

今回の調査で弥生時代後期のV字の溝(SD1001)が見つかったことで、3・5・8次調査で見つかった大溝が一連のもので環状に巡ることや、掘削時期が弥生時代後期に遡る可能性が高

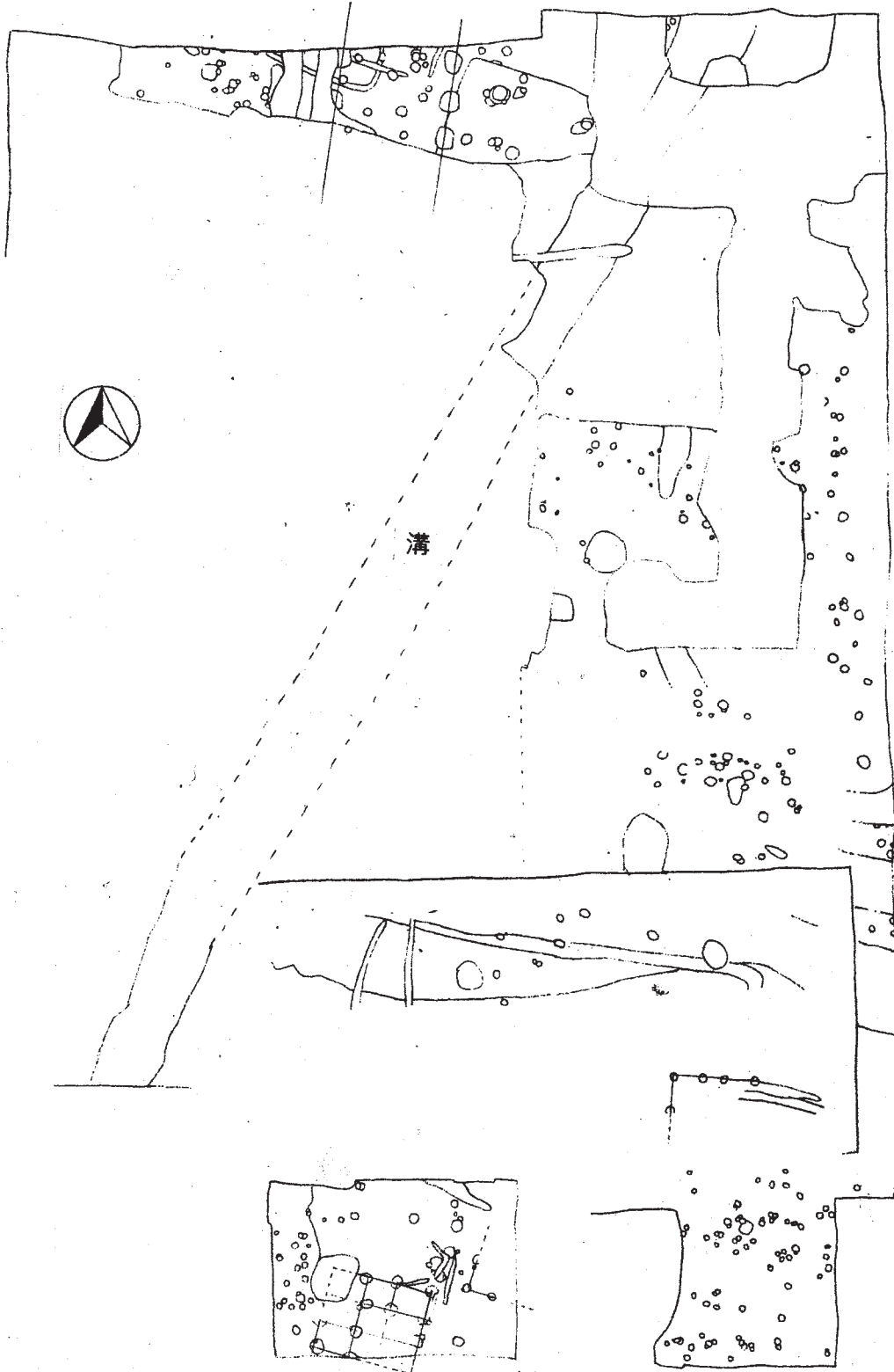
くなりました。しかし、同時期の住居跡と考えられる遺構はこれまでの調査では全く見つかりません。これだけの大溝を掘った人達はどこで生活していたのでしょうか。

再掘削された溝からの出土した須恵器や土師器は古墳時代後期～飛鳥時代の遺物と考えられます。5・8次調査で見つかった大溝や、3・9次調査で見つかった建物群は古墳時代後期～奈良時代の遺構と考えられることから、同時期に機能していたと考えられます。このような溝に囲まれた遺構群は、地域においてどのような役割を担っていたかはこれから検討すべき課題です。

溝SD1001の延長線上はちょうど8次調査区にあたりますが、調査では同様の溝と考えられるような遺構は検出されていません。途中で途切れているか、曲がっているかのどちらかと考えられます。病院の改築はまだまだ続いてゆきます。溝の行方はこれからの調査で明らかになるかも知れません。



掘立柱建物



掘立柱建物

天王遺跡10次調査  
遺構略図 (1 : 300)



# 天王遺跡 第9次発掘調査

所在地	鈴鹿市岸岡町589-2
調査目的	病院施設建設に伴う記録保存
調査期間	平成14年7月31日～14年10月9日
調査面積	546㎡
調査主体	鈴鹿市考古博物館

## 調査成果

今回の調査では、6次調査で検出された3棟を含め8棟の掘立柱建物と井戸1基、溝、土坑、柱穴などを検出しました。

### 飛鳥時代（7世紀）の遺構

3×6間の南北棟の掘立柱建物SB0601、3×3間の倉庫風掘立柱建物SB0602、1×1間の掘立柱建物SB0603は6次調査の時に既に調査されていますが、今回は調査面積が広がることもあり再検出しました。その結果SB0601の規模が正確に確認でき、SB0602は2×3間と考えられていたものが西に1間分大きかったことが分かりました。

SB0601のすぐ北で検出された3×3間の掘立柱建物SB0940は建物の内部に床束を伴わない小型の建物です。

掘立柱建物SB0941は2×5間の東西棟。50～80cmの柱穴を持ち、柱間は一定ではありません。

2×2間の倉庫風掘立柱建物SB0942はSB0941と重なって見つかりました。

掘立柱建物SB0943・SB0944は西側が調査区外になっていますが、東西棟であると推定されます。この2棟はSB0943→SB0944の順序でほぼ同じ場所に建て替えられ、梁行も3間から2間に変更されたことがわかっています。

### 鎌倉時代（13世紀）以降の遺構

井戸SE0928は飛鳥時代の建物SB0943・SB0944の柱穴を壊して掘られていました。隅が丸まった四角形（一辺

約3.7m)の堀方を持ち、内部には一辺約1.2mの四角形に組み立てられた木製の枠が残っていました。

## 出土遺物

飛鳥時代の掘立柱建物群からは時期を推定する手がかりとなる須恵器・土師器などが出土しました。

鎌倉時代の井戸SE0928からは土師器皿・山茶碗などが出土しました。山茶碗のなかには「上」、「さうや?」、「北<sup>す</sup>」の墨書されたものもあります。

溝SD0910からは朱の付着したすり石?、溝SD0918からは水晶で作られた基石が出土しました。

## まとめ

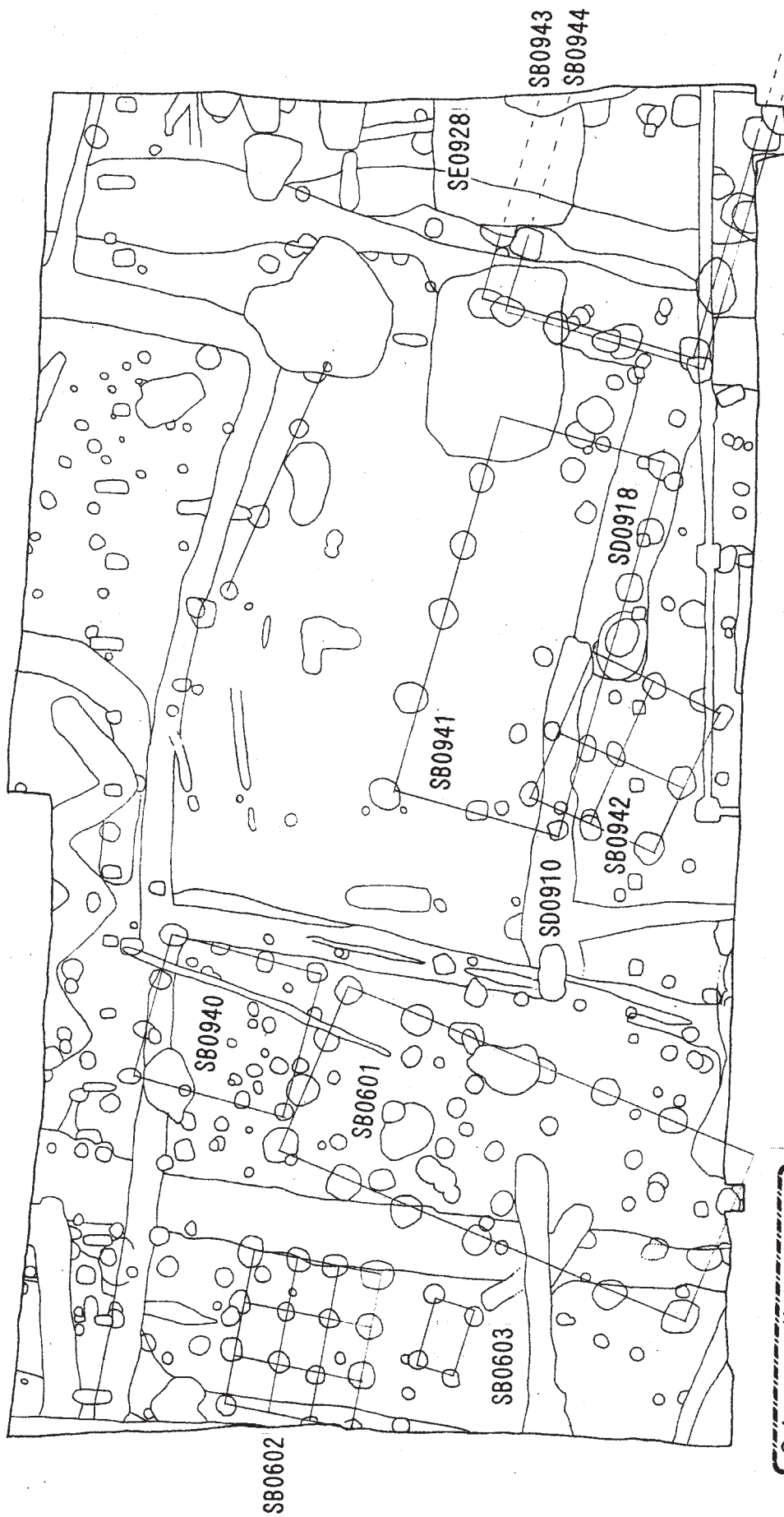
今回は狭い調査区内から8棟もの掘立柱建物がみつきり、遺構密度の高い地区でした。

建物群の時期は7世紀(飛鳥時代)に当たると考えられ、建物の向き、重複する建物や出土遺物から細かく分けると飛鳥時代前葉と中葉の2時期が考えられそうです。3次調査(今回調査区の北西)で見つかっている掘立柱建物群は飛鳥時代後半～奈良時代初頭の官衙的な施設もしくは公的性格を持つ豪族居宅と考えられています。今回の調査で見つかった遺構はその前段階に当たり、建物の規模や計画的な配置から飛鳥時代前葉～中葉の遺構の中でも中心的な建物群とみることができそうです。

中世については、注目される遺物として井戸SE0928から出土した「北<sup>す</sup> (きたのかんだち)」の文字が墨書された山茶碗があげられます。「<sup>す</sup>」は伊勢神宮の行政面を担当した官衙や、神宮の所領である御厨におかれた年貢収納のための役所のことを指す言葉です。

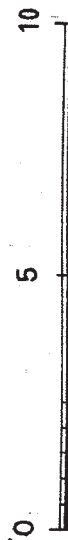
伊勢神宮領である御厨<sup>みくりや</sup>は、古代・中世を通じて全国で500箇所以上が知られその半数以上が伊勢国に分布しています。

天王遺跡が所在する河曲郡では26箇所が知られ、遺跡の近隣では若松南・若松等の御厨がありいずれかの御厨の中心的な施設が周辺に存在した可能性が高いと考えられます。



天王遺跡9次調査

遺構略図 (1:150)



- SA.....柱穴列, 柵
- SB.....掘立柱建物
- SD.....溝
- SE.....井戸

